

戦争特集

エピソード1

野村さん
(野市町)

家族に遺したはがき

今年は、終戦から80年を迎えます。当時の戦争体験を語るこ
とができる人たち取材するこ
とは年々難しくなり、昨今の戦
争の語り部は、当事者である親
世代から聞いた話を、彼らの子
世代が、遺された資料を基に語
るという形に移りつつあります。

今回は、出征した義理の父親
が家族に遺したはがきを自宅で
発見した野村さんと、終戦直前
に中国で生まれ、わずか2歳で
引き揚げを経験した村上光代
さんに、それぞれ貴重なお話を
伺うことができましたので、紹介
します。

担当 広報編集委員
宮崎文敬

エピソード2

村上光代さん
(香我美町)

80 kmに及ぶ逃避行

香我美町在住の村上光代さん
(80)は、中国東北部に位置するハル
ピン市で生まれました。1歳で終戦
を迎え、2歳の時に両親の「4人で
必ず日本の土を踏む」という決意の
もと、2歳年上の姉と共に、遼寧省
葫蘆島市までの約80 kmの道のりを
歩き通しました。

その後、中国と米国の共同で行わ
れていた難民送還事業によって、福
岡県の博多港に着くことができま
した。昭和21年11月の暮れに実家の
ある香我美町へ無事に帰りつきま
すが、服は着の身着のままのボロボ
ロで、満身創痍での生還に、生きて
はいないかと思ひ込んでいた光代さ
んの祖父母は、腰を抜かすほど驚い
たそうです。幸いにも農家であった
ため、その後の食べ物に不自由する
ことはありませんでした。

野市町在住の野村さん(85)は、
家の片づけをした時、古いはがき
を見つけました。それは、野村さん
の旦那さんである宏さんと、義理
の母宛てに、義理の父の玉樹さん
が、戦地に向かう際に書き残した
ものでした。

はがきは軍事項目に検閲が入る
ことから、玉樹さんは「船場(戦場)
へバナナを買いに行く」と書いて、
南方に行くことを家族に伝えまし
た。野村さんが義母から聞いた話
では、玉樹さんが向かった先はイン
ドネシアのモロタイ島で、米軍の
フライピン反攻の起点となるモロ
タイ島の戦いが行われた場所です
た。玉樹さんはそこで戦死しまし
たが、遺骨は戻らず、故人をしのぶ
ための葉っぱだけが義母の所へ届
けられたそうです。玉樹さんは京
都で日本画を学び、高知新聞の挿



▲光代さんのご両親

終戦当時30歳だった父親の義光
さんは軍属(軍人以外で軍隊に所属
する者)で、妻と幼い娘2人を連れ
ての引き揚げは検問も厳しく、大
変困難なものでした。ソ連兵を避け
るため、昼はモロコシ畑に身を隠
し、夜に行動するという慎重な逃避
行を続けましたが、途中で光代さ
んのお姉さんが現地の子どもたち
と遊びに夢中になって家族とはぐ
れたり、葫蘆島市に着いてから光代
さんが栄養失調になって生死をさ
まよったりと、何度も危ない目に
あったそうです。しかし、現地の
人々の善意や施しを受ける幸運に
も恵まれ、誰一人失うことなく日本
へ戻ることができました。

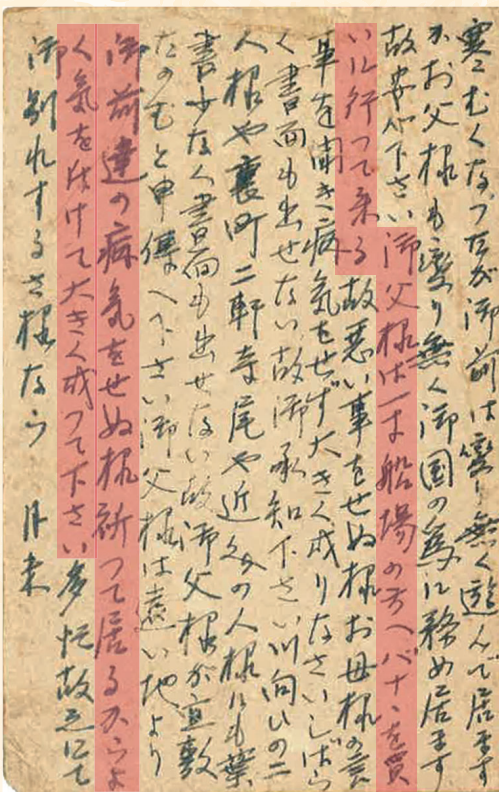
帰国後、親戚間で複数の戦死者
が出ていたことを知った義光さん
は、生き残った後ろめたさから、戦
争について語ることはほとんどあ
りませんでした。そのため、光代さ



▲玉樹さん

絵を担当したこともありまし
た。「生きていれば、やなせたかし
さんのように活躍していたかもし
れない」と、野村さんは無念さをに
じませていました。

このはがきが届いた頃、義母と
宏さんは安芸市に住んでいました
が、玉樹さんが亡くなると野市町
の姉のもとへ身を寄せます。「御前
達の病気をせぬ様祈つて居るから
よく気を付けて大きく成つて下さ

▲玉樹さんが送った実際のはがき
マーカー部分には、本文にある船場(戦場)にバナナを
買いに行くことと家族の健康を祈ることが書かれている

生まれ故郷への思い

光代さんのハルピンでの記憶は
全くありませんでしたが、故郷への
思いや自身のルーツを辿りたい気
持ちは常にあったそうで、平成14
年、偶然にもハルピンを訪れる機会
に恵まれます。両親からの勧めも
あって、戸籍の記録から出生地を探
し当て、その地に再び立つことがで
きた時は、嬉しさと同時に、帰りに
くても帰れずに命を落とした多く
の日本人をしのび、思わず手を合わ
せたそうです。



▲出生地を訪れた光代さん

取材を終えて

野村さんと村上さんには、
共通点がいくつかありました。

それは、現在放送中の朝の
連続テレビ小説「あんぱん」の
戦争描写に感化されたこと、
鹿児島県の知覧特攻平和
会館を訪れて、戦争を語り
継ぐことが残された者の責務
だと決意されたこと、そして、
海外を度々訪れ、常にアンテ
ナを外に向けることで昨今の
世界情勢に危機感を抱
き、「戦争を二度としてはいい
ない」と、戦争を語る重要性
を強く抱いたことです。

村上さんは「若い人たちに
は悲惨な戦争を学べる場所
に足を運んでほしい」と、主体
性を持った平和学習を強く
訴えていました。

お二人のお話は、私たちが
戦争や平和に対して、どう向
き合うべきか、一つの手本に
なるような気がしました。

※ご本人の意向により、野村さん
は名字のみの記載とさせていただきます